

「子どもに危険予測 予知 (※) 能力を育てる」「子どもが危険を自ら回避できるようにしていく」と、安全計画等を書くことは大事ですが…。

それを言う前に、おとなが理解すべき大前提！

1. 「自分の命を守る」を、未就学児に要求してはいけない。子どもの命を守る責務は、おとなにある。
2. 危険を予測でき、回避できるはずの私たちおとなは日々、予測と回避をしている？できている？

なぜ？

1. 子どもが「これは危ない (かもしれない) から、こうしたほうがいい (=危険の予測)」「これは危ない (かもしれない) から避けたほうがいい / しないほうがいい (危険の回避)」と、できごとと結果の間の因果関係を考えられるよう、そして、その考えに基づいて行動できるよう育てていくことは重要。

しかし、命が失われる部分 (例: 息ができないできごと、交通事故) に関しては、(育てていくことは大事であるものの)「教えたのだから、子どもは危険なことをしないでだろう」は不可能。未就学児に「死」の概念はなく、年長児ぐらいから徐々に「すべての生き物が死に、死んだら決して元に戻らない」ということを理解し始めるだけだから。

「そんなことをしたら死んじゃうよ」と言うだけでは、安全教育として効果がない (※※)。

→ どう言うか →

(「ダメ」と止めるだけでは、子どもは因果関係 (危険の予測能力の基盤) を学べないのだから…)

例

○○のようなヒモを自分や他の人の首に巻いてはいけないルールだよ [何をしてはいけないか、具体的に]。首に巻くと、息ができなくなってしまうから。息ができなくて苦しいよね。ずっと息ができなくて死んじゃうんだよ [理由を具体的に伝える]。なんで、それを巻いていたの？ [やさしく、子どもの行動の動機を聞く。子どもの動機を無視してはいけない] あ、～をしたかったのか！ じゃあ、△△でやってみようよ [代替案があれば提示]。

→ これをまず家庭で、そして園でも繰り返すことで、子どもの脳はおとなが言っている因果関係の論理を吸収し、自分でも同じ因果関係を使って行動を制御できるようになっていく (自己制御スキルの発達過程。『3000万語の格差』にも『ペアレント・ネイション』にも書いてある点)。理由を言わない「ダメ!」「やめて!」では自己制御スキルは育たない。

2. 「危険を予測できる＝危険を回避できる」ではない。それは、おとなであるあなた自身を見たらわかること。「ここで子どもが指を強くはさんだら指が切断されるかも」と危険を予測しても、指はさみ防止シートをつけない、「ここに首を入れたら子どもが死ぬかも」と予測してもすき間を埋めない、自分自身についても「今、両手に荷物を下げて走って転んだら、ケガをするかも」と予測しても走り出す、など。大脳の前頭葉が成熟して(=25歳頃)それなりに合理的に考え、判断できるはずのおとなであっても、事故や災害に対しては「予測＝回避」ではない(※※※)。脳が成熟もしておらず、因果関係を学び始めたばかりの未就学児に、予測と回避を自分でしろと？

また、事故も災害も「予測できれば(結果を)回避できる」わけではない。自分がどんなに「万が一」を予測して行動していても、たとえば歩行中、前方を見ていない車がぶつかってくることはある。園の中で別の子どもやおとながぶつかってくることもある。たとえば2022年8月、鹿児島県の小学校で起きた事故のように、イチョウの大木の大きな枝が落ちるその瞬間に真下で校長先生が芝刈りをしていて、枝に直撃されて亡くなるというようなことも起こるのが(確率に支配されている部分の大きい)事故というもの(「保育の安全」検索の「ニュース」2022年の該当日にこの事故は記載)。

★文中で下線波線にしている箇所に留意：因果関係や、リスクと結果の関連性の思考は未就学児の場合、育ち始めたばかりであり、思春期、20代前半にかけて成熟していくものである。この点を理解せず、「未就学児でも言えばわかるはず」「できるはず」と考えるのは、認知発達を理解してないだけ。

※ 予知≠予測。「予知」は、地震や運命のようなものに使う言葉。「予測」は、できごとの因果関係を理解して「こうだから、こうなる」「こうすると、こうなる」という推論のもとに行うもの。「台風の進路予測」とは言っても「台風の進路予知」とは言わない。

※※ 一方で、自分をケアしている人の感情は0歳児も感知するので、周囲が死に対して動揺していることは感じ取り、不安を感じる。また、年中児や年長児は(まだ、死の概念を理解していないぶん)、誰かが死んでしまって(=いなくなってしまう)まわりの皆が悲しんでいることを「自分が～をしたからではないか」「自分が(いなくなった人について)～と考えたからではないか」と誤った因果関係を信じてしまうこともある。この点で、誰かしらの死が起きた時の、小学校低学年以下の子どもの心のケアはとても重要。

※※※ 事故はできごと(例：子どもが階段から落ちる。車同士が衝突する)自体が確率的であり、かつ、できごとの結果がどうなるかも確率に支配されるため、「楽観バイアス」(そんなことは起きない)や「正常性バイアス」(起きててもたいしたことはない)といった認知バイアスの影響を強くこうむる。子どもが階段の上にといたら常に転落し(=100%)、転落したら必ず死ぬというなら認知バイアスは働かない。車を走らせていたら必ず衝突し…、この仮説自体が成り立たない。だから、おとなでもバイアスが働き、「予測＝回避」にならない。

参照：死の概念の発達については、スタンフォード医科大学院のサイト等
<https://www.stanfordchildrens.org/en/topic/default?id=a-childs-concept-of-death-90-P03044>